

ゴリラの行動から 人間の不思議な特徴を考える

JUNIOR CAMPUS SPECIAL LECTURE

平成
23年

9/17 土

10:00~11:30

◆理学研究科教授 理学部長・研究科長 山極 壽一

〔講演内容〕

ゴリラは、人間に近い霊長類の仲間の中で最大の体格をしています。なぜそんなに大きくなったのか。それにはわけがあります。実は私たち人間の体の特徴や日々の行動にも、長い進化の歴史の中で選ばれてきたわけがあるのです。たとえば、私たちは二足で立って歩きます。毎朝「おはよう」とあいさつをします。食事を家族や友達といっしょにします。音楽をきくと楽しくなったり、悲しくなったりします。昔の友達をよく覚えていて、すっかり変わってしまっているのに、また前と同じように付き合うことができます。こんな人間の行動は、実はサルやゴリラから見るととても不思議なことなのです。なぜ不思議なのか、それをみんなできいっしょに考えてみましょう。



◆理学研究科教授 理学部長・研究科長

山 極 壽 一



〔プロフィール〕

1952年東京生まれ。京都大学理学部卒、理学博士。（財）日本モンキーセンター研究員、京都大学霊長類研究所助手を経て、現在京都大学大学院理学研究科教授、理学部長・研究科長、国際霊長類学会会長。1978年よりルワンダ（ヴィルンガ）、コンゴ民主共和国（カフジ）、ガボン（ムカラバ）などアフリカ各地でゴリラの野外研究に従事。現在はゴリラとチンパンジーが熱帯林の同じ場所でのどのように共存しているか、他の生物といかに共進化してきたかを研究している。類人猿の行動や生態をもとに初期人類の生活を復元し、人類に特有な社会特徴の由来を探っている。また、ガボンではJST/JICAの地球規模課題対応国際科学技術協力「野生生物と人間の共生を通じた熱帯林の生物多様性保全」事業、コンゴ民主共和国ではゴリラと人との共生を目指したNGOポレボレ基金を推進している。著書に『ゴリラとヒトの間』（講談社現代新書）、『家族の起源』（東京大学出版会）、『ゴリラの森に暮らす』（N T T出版）、『ジャングルで学んだこと』（フレーベル館）、『父という余分なもの』（新書館）、『オトコの進化論』（ちくま新書）、『ゴリラ』（東京大学出版会）、『サルと歩いた屋久島』（山と溪谷社）、『人間性の起源と進化』（編著、昭和堂）、『ヒトはどのようにしてつくられたか』（編著、岩波書店）、『暴力はどこからきたか』（NHKブックス）、『いま食べることを問う』（共著、農文協）、『人類進化論』（裳華房）、『ゴリラ図鑑』（文溪堂）など。